E. A. ポウの反カリフォルニア表象

――『ユリイカ』(1848) への軌跡 ――

村　上　恵梨花

序　"Eureka！" と*Eureka*

歴史における〈発見〉には，その後の世界の歴史に決定的な結果をもたらしたものが多々ある。アメリカの「発見」に関しては，マーク・トウェインが『うすのろウィルソン』(1894) で述べたように，発見しそこなった方が良かったのかもしれない。1992年はコロンブスのアメリカ「到達」あるいは「侵略」500年にあたったが，その前後からアメリカでは，「ラティーノ」や「チカーノ」の文学の公認化への歴史が始まった。

では，カリフォルニアの「金」の発見はその後のアメリカをどう変えたのだろうか。マルクスの予言によれば，世界交通の重心は中世ではイタリア，近代ではイギリス，今日では北米半島の南半であり，「そのときこそ太平洋は，今日大西洋が，そして古代中世に地中海が演じた同じ役割を－世界交通の大水路たる役割を演ずることになるだろう。」とフォーティ・ナイナーズとその子孫を喜ばすことが現出したのだ。

この金発見の言葉「われ発見せり」は1848年に発せられた。同年ポウは宇宙論，散文詩『ユリイカ』を書いた。翌1849年ポウは晩年の詩「エルドラドオ」を残して死ぬ。モントレー市では代表者会議が開かれ，カリフォルニアの州境の決定が議論された。石川好は『カリフォルニア・ストーリー』(1983) でその事情をこう要約している。

> 代表団が熱心だったのは，このカリフォルニア州の境界をどこにおくかという点であった。そうした大きな話だったら何時間でも出来るのがカリフォルニアンである。西側は海で問題はない。北部は1819年のスペインとの条約で北緯四十二度線と決っている。南もこれまたガダルペ・イダルゴ条約で基本線が出来ている。残るは東側である。東に行けばロッキー山脈を越えアメリカ大陸すべてを含む。そこでとりあえず，ロッキー山脈までとするか，もう一つ手前のシエラ・ネバダ山脈を境界にするか意見が別れた。前者を「ラージ・ステイト派」，後者を「スモール・ステイト派」と呼ぶ。結局現在の大きさに結着がつくのだが，「スモール・ステイト派」がユタ州内部までその境界を広げようとしなかったのは，すでに東部を追われソルトレークに入植していたモルモン教徒への配慮からだった。しかし口の悪い連中に言わせると，中西部から追われ，さらにアメリカの宗教界から常に異端視されていた，モルモン教徒を再びおびやかすことを恐れたのではなく，彼らの一夫多妻制をカリフォルニアに持ち込まれるのが恐ろしかったのだ，ということになる。それが真実ならカリフォルニアンもかなり純情だったことになる。(94頁)

その後カリフォルニアに対するアメリカの承認が遅れたため，カリフォルニアにはアメリカ国旗，カリフォルニア共和国旗，メキシコ国旗がたなびく状態が続いた。それはカリフォルニア州の以前の歴史が集約されている状況であるが，1850年以降のカリフォルニア州の歴史は南北戦争に向かっていくことになる。以後，本論では，ゴールド・ラッシュのカリフォルニア表象をめぐるアメリカ文学の言説として，ポウとH. メルヴィル文学を中心に，西部と象徴主義の文脈のなかで，「反カリフォルニア表象」を展開していく。

〈地方〉だったカリフォルニアは島として伝説でうたわれ，近代，19世紀ゴールド・ラッシュに見舞われ，人口も急増し，やがてアメリカ合州国のカリフォルニア州となっていった。合州国で無名だったカリフォルニア州は太平洋戦争という運に恵まれ，戦後は有力州の一つになっていく。こうしたカリフォルニアの歴史は〈地方〉喪失のそれだった。その恐れは，十分自覚されてなくとも，文学者の直観が捉えた反カリフォルニア表象として予示されていた。以下詳述するポウとメルヴィルの反カリフォルニア表象の意味は，既に「北」と「南」の緊張の先駆的な表象であった点にあろう。

金発見を述べた序論の最後に，今後の議論の軸として，高利貸を嫌ったアリストテレスの『アテナイ人の国政』からの文章とメキシコの「黄金の男たち」讃歌を引いておく。後者はジェイムズ・ミッチェナーの『センテニアル』におけるマジョリティとマイノリティの緊張の場面からのものである。アリストテレスは国事を民衆によって委ねられたソロンの人柄をこう述べていた。

> というのは彼が次のような句をもってはじまる悲歌を作っていたからである。
>
> 私は識る，そしてイオニアの最も古き地の切り殺さるるを眺めるとき私の心の奥底に苦痛が横たわる。
>
> この詩で彼は双方のために双方と戦い，また論破しており，その後で互いに今までの敵愾心をやめることを勧告している。(三) ソロンはその生まれからいっても名声からいっても一流中の一人であったが，財産と地位においては中流に属していた。これは他のことからも認められるが，また彼自身次のような詩句で，富者に貧らぬように勧告しているのもその証拠である。
>
> 多くの財宝に満ち飽きたる汝ら，胸のうちなる激しき情を鎮めて，大いなる心を適度に保てよ。我らとても従うまじく，汝らもすべてを得ることは能わじ。
>
> そして彼は全くいつでも抗争の責任を富者に帰しているのである。それゆえ彼は悲歌の初めでも「愛銭と傲慢」とを虞れると歌い，あたかもこれにより敵対が起ったかのごとくいっている。(422－23頁)

メキシコ人たちに何よりも深い満足を与えた歌は，『パンチョ・ヴィリャのコリード』だった。というのも，その歌詞は，1916年の戦いでのメキシコ人の勝利をうたっていたからだ。この時彼らは，パーシング将軍の率いる無能なアメリカ軍をさんざんにやっつけたのである。

> あれは二月の二十三日／ウィルスン大統領は六千の米兵を
> パンチョ・ヴィリャを追いつめるため／山を越え，野を越えてメキシコに送った

二組の男声四重唱でうたわれるこの威勢のいいバラードは，ヴィリャがアメリカ軍をじらして，次々に待伏せの場所におびき寄せ，屈辱的な敗北を喫せしめるまでの一部始終を幾節もの歌詞で語っていた。

> ヴァリエンテ　ヴァリエンテ　パンチョ・ヴィリャ！／コンキスタドール　イ　スス　ドラドス！

かなり経ってから，ようやくトランキリーノは，自分もまたドラドスのひとりであったことを告白した。ドラドス，つまり“黄金の男たち”の意味で，チワワやソノーラやデュランゴを席巻した人民軍をさす。このレコードがかかると，彼はきまって眼を閉じて聞き入り，「エル・トレン・ミリタール」という歌詞のところで眼をあけて，自分を見守っている男たちにほほえみかける。そして男たちは，自分たちの乗ったことのないそういう列車に乗った彼に敬意を表して，重々しくうなずいてみせるのだ。

おおパンチョ・ヴィリャよ！きみは勇敢に戦った！／憎むべきヤンキーをわれらが祖国から追いはらった／俺たちは尊敬する，きみときみの黄金の男たちを
おおパンチョ・ヴィリャよ／おれに戦うことを教えてくれ（957頁）

フォーティ・ナイナーズが向かったカリフォルニアのはるか東にギリシア，カリフォルニアの南にメキシコがあった。両者の〈黄金〉を文脈にして，アメリカ19世紀の反カリフォルニア表象の系譜の一部をポウとメルヴィルというアウトサイダー作家を中心に考えてみることは，〈1992年〉の意味を捉える契機ともなろう。

Ⅰ　ポウの「発見」と「探求」／「エルドラド」と「ゴルコンダ」

その装いも　いと華かな／雄々しい騎士が／陽光のなか　夜闇のなかを
歌をうたって／はるばる旅を重ねてきた，／黄金の国をさがし求めて。
だがこの勇士も／次第に年老い，／心には翳がさしてきた，
見かけだけでも／黄金の国に／似ている土地さえみつからぬので。
今はもはや力さえも／尽きはてたその時に，／巡礼の影と出会った騎士は
「影よ」と問うた，／「どこにあるのだ，／あの黄金の国というのは？」
影は答えた，／「月の山々を／乗り越えた彼方　影の谷の／
底深く　馬を駆れ，／雄々しく駆れよ，／黄金の国を求めるならば！」（186－87頁）

マニフェスト・デスティニーの下，〈西〉へ向かっていたアメリカに金発見の大ニュースが飛び回っていた。フォーティ・ナイナーズが「黄金の国」をめざしていた。詩「エルドラドオ」でポウはその「影」を求め，〈歌〉のなかに〈黄金〉を探求していた。ポウは生涯〈黄金〉を追究する「騎士」だった。そのまなざしは「東」と「西」の間に向けられていた。1849年から遡る事13年前，1836年「ザンテ島へのソネット」をうたっていた。

美しい島よ，あらゆる花の中でももっとも美しい花の名前の島，
　優しい名前の中でももっとも優しい名前を与えられた島よ！
そなたの姿，そなたのたたずまいを眺める時に，
　たちまち心によみがえるのは輝かしかった時代の数知れぬ思い出！
過ぎし日の至福に満ちた，ああ，なんと数知れぬ情景！
　葬り去られた希望についての，ああ，なんと数知れぬ思い！
もはやない乙女の，ああ，なんと数知れぬ幻－
　そなたの緑の丘に，その乙女はもはやない！
もはやない！　ああ，この物悲しい魔法の言葉で
　すべては変りはてる！　そなたの魅力に心楽しむことももはやない－
そなたの思い出ももはやない！　今からはもう，私には，
　花咲き乱れたそなたの岸辺も，呪われた土地としか見えまい，
おお，ヒヤシンスの島！　おお，金紅色のザンテ島！
　「黄金の島！（イソーラ・ドーロ）東方の花（フィオール・デイ・レヴァンテ）よ！」

「もはやない」乙女は「黄金の島！東方の花よ！」とうたわれていた。「金」ではなく，〈黄金〉を求めていた「影」の詩人ポウには，推理小説でも〈エルドラド〉というアメリカ大陸の西岸の海の果てに存在していると伝えられてきた，「黄金で出来たカリフォルニア島」を拒絶するものがあったようである。フォーティ・ナイナーズよりはドラドス，黄金の男たちの一人，文学において

〈黄金〉を求める革命家であった。この経緯を「黄金虫」(1843) と「フォン・ケンペレンと彼の発見」(1849) における，ポウの態度の中に跡付けていこう。デモクラシーとそれを盲信する大衆に対し，ポウは環境の中の自己を位置づけている。

「黄金虫」と「フォン・ケンペレン」両作は，紙幣経済に翻弄されるアメリカに対し，太陽の運行の日の出から日没前の世界と夜との対比の中で，東と西との連続のうちに発見される〈黄金〉の方法を語っている。共に錬金術的努力への賛歌とアメリカへの笑いの表現なのだ。「黄金虫」冒頭部分は既に東と西のトポス，プロテスタントのレグランドが対峙している良識世界，老若に見られる方法の差などを伝えている。

> 久しい以前のこと，ぼくはウィリアム・レグランド氏なる人物と親交を結んでいた。彼はあるユグノー教徒の一族の出で，かつては裕福だったのだが，一連の不幸のせいで貧しい暮しを余儀なくされていた。災厄にともなう屈辱感を避けようとして，父祖の地であるニュー・オーリーンズを去り，南カロライナ州，チャールストンに近いサリヴァン島に住みついたのである。
>
> これはじつに変った島である。(中略) 本土からは，あまり目立たない小川で仕切られているのだが，この小川は，水鶏(くいな)の好んで集る蘆と泥砂の荒地を，ちょうどにじみ出るような感じで流れているのだ。(中略) ただし－西端に近くモウルトリー城砦があるあたり，そして，夏のあいだチャールストンの埃と炎熱を逃れて来る人々の借りるみすぼらしい木造家屋が数軒ちらばっているあたりには，あの毛のこわい棕櫚(パルメットー)がある。
>
> (中略)
>
> 矮林のいちばん奥，島の東端すなわち遠いほうの端からあまり離れていないところに，レグランドは自分で小さな小屋を建てて住んでいたのだが，ぼくがたまたま彼と面識を得たのはここにおいてであった。この面識はやがて友情に変った。なぜならこの隠遁者には，関心と尊敬をいだかせるものがあったからである。ぼくは，彼が高い教育を受けており，なみなみならぬ知力を備えているけれども，嫌人癖に冒されていて，熱狂したかと思うと憂鬱に落ちこむ，頑固な気質の男であることを知った。なかなかの蔵書家だったが，本はめったに読まない。銃猟や釣り，あるいは海岸や桃金嬢の茂みのなかをぶらついて貝殻や昆虫を探すことが，主な楽しみだった。そして彼の昆虫標本のコレクションは，スワンメルダムのような碩学をも羨望させるに足るものだったのである。このように逍遥する際，彼はいつも，ジュピターという名の老黒人を同行していた。この黒人は，レグランド家の没落以前に解放されていた者だが，若い「ウィル旦那」の後について歩くことを自分の権利だと考えており，おどしてもすかしてもやめさせることができなかった。(8－9頁)

レグランドのプロテスタンティズムは無論芸術の進歩におけるそれであり，老ジュピターの「権利」にも語り手の医学的忠告にも頑固に抵抗している。レグランドの抵抗と等しい彼の「手紙」は，宝発見への彼の熱狂を示していた。物語開始の1ヶ月後，サリヴァン島に住むレグランドからチャールストンに住む語り手の手元に手紙が渡される。レグランドは少年の頃，富裕であった時代にはニュー・オーリーンズに住んでいたのだから，今彼は大陸の東，チャールストンよりもさらに東に位置している。

したがって，一時黄金虫はG中尉によって島の西，モールトリ要塞に持ち去られていたという記述は宝が東のなかの西に結びつけられていることを示すが，この事実はカリフォルニア島での金の発見が大陸の西端の方向というのとは異なり，キッド船長の東の方向から宝が持ち込まれていたという歴史伝説と呼応し，ポウの東と西との関係を浮彫りにしている。ポウにとって，東西は，メルヴィルの場合同様，知の伝統の所在を示すのだ。

ところで，レグランドからの手紙は読者に何を語っているのだろうか。ジュピターによると，「おらは，どういうわけか，虫の口の格好が気にくわなかっただから，指じゃ持ちたくねえと思って，めっけた紙きれでつかまえただ。紙にくるんで，紙の端っこを虫の口んなかへつっこんだだよ」（16頁）とあるように，紙幣経済社会のなかで偶然見つけられた「紙」が宝探しの鍵となったのだ。この紙と手紙はテキスト内で結びつく。羊皮紙とペン／スタイラスと〈黄金〉とが一体化するのだ。

この手紙の書きぶりには，ぼくをひどく不安にするものがあった。全体の文体が，普段の彼の文体とひどく違っている。一体，何を夢想しているのだろう？どんな新奇な考えが，彼の興奮しやすい頭脳にとり憑いたのだろう？どんな「重大この上ないこと」を，彼が処理しなければならぬというのだろう？ジュピターの話の様子では，あまりいいことではなさそうだ。友人の理性は度重なる不幸のため，ついにまったく乱れてしまったのではないかとぼくは恐れた。

（中略）

モウルトリー城砦の北にある小さな入江にはいり，二マイルばかり歩いて小屋に着いた。到着したのは午後三時ごろである。レグランドは待ちこがれていた。彼はぼくの手を，神経質な熱っぽさ（アンプレスマン）をこめて握ったので，ぼくは不安になり，すでにいだいている疑惑を強めた。彼の顔色は死人のように蒼白く，窪んだ眼は不自然なほどぎらぎら光っていた。ぼくは，彼の健康についてすこし訊ねてから，何の話をしたらいいか判らないので，G＊＊中尉から黄金虫を返してもらったかと言った。

「ええ，もちろんさ」と彼は顔を紅潮させて答えた。「翌朝，返してもらった。どんなことがあったって，あの黄金虫と別れるもんか。君，知ってるかい？ジュピターがあれについて言ったのは，本当なんだぜ」

「どういう点で本当なの？」と，ぼくは心に悲しい予感をいだきながら言った。

「あれが本当の黄金で出来てる虫だと考えた点で。」彼が厳粛な口調でそう言ったので，ぼくは名状しがたい衝撃を受けた。

「この虫がぼくの財産をこさえるはずだ」と彼は，勝ち誇ったように微笑しながら言いつづけた。

「先祖代々の財産を取返してくれるってわけだ。とすれば，ぼくがあの虫を大事にするのも不思議じゃなかろう？運命の女神があれをぼくに授けようと考えた以上，ぼくがそれを手引として正しく使えば，黄金のところへたどり着けるというわけだよ。ジュピター，あの黄金虫を持って来いよ」（18－20頁）

文字による増殖作用は紙幣文化／新聞文化の指示性に対し，異常な豊かさを示唆し，〈紙〉は黄金の夢を実現させる。良識の圏外で。レグランドの発見した金鉱は，リカルドゥーが『小説のテキスト』で見事に分析しているように，エルドラドではないのだ。カリフォルニア島ではなく，ゴルコンダとポウのテキストから読めるのだ。エルドラドの影，ゴルコンダという虚構は真理／美の反カリフォルニア表象なのだ。

先にみたように，西の方角は，増大へのある傾向をもつ。啓示の与えられる夜（無尽蔵の財宝への黄金虫の変身の始まり）には，昆虫は西に，つまりモールトリ要塞にある。クレビヨンやキノーを引用している作者が，《moult》［"たくさん"という意の仏語］という語を知らなかったらおかしなものであろう。そればかりではない。Moultrieは，moultreesという二国語の地口として解することもできる。要塞に黄金虫をもっていくG大尉は，ひそかにもう一つの別な場面を，つまりジュピターが《八本か十本ぐらいの柏とともに聳えている》ユリの木に虫をもって登っていく場面を告知しているのである。

西からやってきて，微小な昆虫の宝物を一

財産の大きさにまで増大せしめることのできる主人公には，ルグラン［ル・グランと読めば"大いなる者""偉人"の意］という当を得た名前がついている。ルグランが頭蓋骨の紋章つきの散文と奇妙に馴れ親しむ点については，Williamをwill I amつまり"われは遺書なり"というように読みとると，いっそうよく理解されてくる。ジュピターのよく使う略号の《massa Will》が指示しているのも，そうした道なのではあるまいか？

宝は，無数の手掛りや暗示のようなものによって物語の多くの箇所で部分的に指示されているので，《gold》という語も，ソシュールが亜文字的（イポグラマテイク）と名づけた相の下に，多くの文字の中にあらわれてくると考えることはできぬであろうか？

（中略）

たとえば，テクストの中に何度も姿をあらわす《old》という形容詞は，謎めいたある名前つまりモールトリ要塞の大尉の名前のもつ機能を明かしてくれる，すなわちG＋old＝Goldというように。この英語の原文では，富の国がエルドラドではなく《*Gol*cond*a*》であってもほとんどおどろくにあたるまい。

（74－5頁）

宝の山をエルドラドではなくゴルコンダと読む妥当性は「フォン・ケンペレン」の中に潜んでいると思われる。それは「紙」を忠実に書き，読むという行為への作者の信仰に基づくものだ。フォン・ケンペレンの発見に最初の暗示を与えた「著名な化学者，ハンフレー・デイヴィー卿の日記」に見られる書くことの責任についての語り手の言及からこの科学物語は始まる。

この小冊子は，たとえ筆者の死亡したあとにでも公衆の目に触れることを目的として書かれたものではない。これは，ものを書くという仕事をよく知っているほどの人間なら，この書の文体をちょっと調べてみただけで，すぐ納得がゆくだろう。（中略）実はハンフレー・デイヴィー卿は，科学上の問題で自分の責任をとる，世界で最後の人間だといってもいい人物だったのだ。卿はインチキなものを並外れて嫌悪したばかりでなく，何にでも手を染める人間に見られることを病的に恐れていた。（中略）右に引用した個所が，これと関連のある他の類似した幾つかの個所と一緒になって，フォン・ケンペレンに示唆を与えたということを僕は信じて疑わない。が，くりかえして言うが，この重大な（いかなる事情の下にあっても重大な）発見自体が将来人間全体の役に立つか否かという問題も，あとになってみないとわからない。フォン・ケンペレンと彼の身辺の友人たちが将来この発見から豊かな収穫をわがものとするに違いないことを一瞬でも疑うことはおろかなわざであろう。彼らは，やがて，本質的な価値をもった他の物と一緒に土地と家屋をしこたま買いこむことによってこの発見を「現実化」しないほど，頭の弱い連中ではないのだ。

（352－54頁）

フォン・ケンペレンに引継がれた黄金の夢の秘密の記録と人類の将来をめぐって，語り手は推理物語の手順で，ケンペレンの発見の意味を解くことのできなかった警官たちの愚かさを笑った後，〈事実〉を語るのである。彼の努力と世間とは錬金術と偏見との関係だった。それはレグランド／ルグランのユリノキ幻想やボードレールの象徴の森に通じるケンペレンの〈黄金〉への方法だった。文中の「重大な」発見をしたケンペレンと探偵デュパンは方法において通じる。

（語られた限りでの）フォン・ケンペレンの告白の詳細や彼が釈放された顛末は，すでに世間周知の事実となっているから，ここで繰返す必要はあるまい。彼が錬金術に関する古い幻想を，文字通りとはいわぬまでも，その精神と結果において，現実に実現したという

事実は，健全な判断力をそなえた人間なら疑うことは許されない。（中略）事実を簡単に述べれば，現在にいたるまで，一切の分析は失敗に帰したということだ。フォン・ケンペレンが，いまでは世間に知れわたっている彼自身の謎を解く鍵をわれわれに与える気になるまでは，この問題は，これからさき何年も現在のままである公算が強い。いままでのところ，すでに判明していると言っていい事実はただ，「その種類と割合は不明であるが，或る他の物質と一緒にすることによって，鉛から思うままに容易に純金をつくることができる」ということだけである。（359頁）

ケンペレンの方法は〈信用〉に頼らざるをえない社会では信用されぬ類の〈真理〉への方法であり，その発見は歴史の埒外の，反カリフォルニア表象の問題であった。1840年代のポウ以前にも，「ザンテ島へのソネット」を書いた1836年後，1830年代のポウは，「約束ごと」（1835），「オムレット公爵」（1836）後，錬金術詩人の黄金の夢実現に向かって，「リジイア」（1838）では，語り手のリジイア幻想を展開していた。

ポウの反カリフォルニア表象の展開は常に東と西との間で実現されるもので，その二本柱として，ユリノキ幻想とリジイア幻想[(1)]が想定されていた。前者は〈自然〉のなかに，後者は〈女〉のなかに，〈黄金〉へと導かれる契機を見出すポウの理想追究のかたちであった。この側面から「フォン・ケンペレン」の結びを読んでみよう。

この発見から直接に或いは究極的に生れて来る結果については，いろいろの推測が行われている――思考力のある人間だったら，大抵，カリフォルニアに近ごろ起っている新しい事情がもたらした金問題全般に対する世人の興味の増大という現象にこの問題を結びつけることに躊躇しないだろう。（中略）フォン・ケンペレンの分析が甚だ時宜を得ていなかったということである。カリフォルニアの金鉱には金がふんだんに埋もれているために金はやがて著しく価値がうすれ，一攫千金の夢を抱いてそんなに遠くまで出かけて行ってもたいしたことはないのではないかというただそれだけの不安から，多くの人々がカリフォルニアへ出かけて行くことをさしひかえているとしたら――フォン・ケンペレンのこの驚くべき発見が一般に披露されることによって，これからカリフォルニアへ移住しようという人々の心は，とくに，現実に鉱山地帯で働いている人々の心は，現在，どんな印象を受けるであろうか？この発見が雄弁に断言している事実は，金は，（中略）現在では，或いは少なくとも近い将来においては（なぜなら，フォン・ケンペレンがいつまでも自分の秘密を隠しおおせるとは考えられないからだ）鉛と同じ程度の価値しかもたないもの，銀よりはるかに値打ちのないものとなり終るだろうということである。確かに，この発見がもたらす結果を前もって予測することは非常に困難だが，ただ一つはっきりと言えるのは，もし六ヶ月前にこの発見が世間に知れていたら，カリフォルニアの開拓地には大きな影響を及ぼしたに相違ないということである。

現在までのところ，ヨーロッパにあらわれたもっとも顕著な結果として挙げられるのは，鉛の価格が二倍かた騰貴し，銀の価格が二割近く上昇したことである。（359－60頁）

（1） ポウの1830年代の「リジイア幻想」と1840年代の「ユリノキ幻想」はゴシック的世界と推理小説に表れ，両者は『ユリイカ』（1848）で一つになると考えられる。前者は〈女〉への幻想，後者は〈自然〉への幻想で，二つの幻想が宇宙論で一つになる。以上の幻想はポウの反カリフォルニア表象の基礎となるものであった。

フォン・ケンペレンの発見の結果，「鉛の価格が二倍かた騰貴し，銀の価格が二割近く上昇した」と作者が書くことで，『ユリイカ』を自己弁護する姿勢を明示したと言えよう。では，次節でメルヴィルの『マーディ』(1849) との比較で，カリフォルニア表象をめぐる問題とポウの『ユリイカ』(1848) と「メロンタ・タウタ」(1849) を取り上げてみる。「黄金虫」のG大尉とデュパンシリーズのG警視総監はGoldのGを示しているように，Gをめぐる社会的現実に対しポウが，メルヴィルが夢見たGの発見過程は事実と想像力，社会と文学とのラディカルな問いとなるのだ。

Ⅱ　『ユリイカ』ともう一つのアメリカ／ワシントンとモブ

ポウの「黒猫」(1843) における飲酒と世間の良識と天邪鬼との関わりが，19世紀アメリカの紙幣経済システムと大衆の生活とを反映している点から議論を始めることができる。ポウは飲酒対世間という図式から，ゴールド・ラッシュに見られることになる，その浅薄な「良識」を克服するものとして「天邪鬼」を案出したのである。

> わたしたちの友情は，こうして数年にわたってつづいたが，その間にわたしの気質と性格は――大酒という悪魔のため――（語るもはずかしいことながら）昔日の面影もないまで変わってしまったのだ。（中略）わたしはただ動物たちの世話を怠っただけでなく，彼らを虐待したのだ。だがプルートーに対してだけは，まだわたしも虐待の手を控えておくだけの分別を残していた。（中略）しかし病は――ああ，飲酒にまさる病がこの世にあろうか！――次第に昂じ，ついにはプルートーまで――今は年もとり，したがっていくらか気むずかしくなっていたが，そのプルートーまで――わたしの不機嫌の影響をつぶさに味わい始めたのだ。(62頁)

「(語るもはずかしいことながら)」とかっこ付きで告白した「大酒という悪魔」に明け渡した魂は，「良識」を〈法〉として考える社会に許しを乞うているように書かれている。しかし無論，作者の意図は社会的良心を語るところにはない。「哲学」という権威が認めていない，反社会的な衝動たる「片意地な根性」を〈黒猫〉というこれまた反社会的なイメージを重ね合わせることで，ポウは後のゴールド・ラッシュに流されない，もう一つのアメリカを呈示したのだ。

> この根性については。哲学も何も認めてはいない。しかし片意地こそ人間の心に巣食う原始的な衝動の一つであり，人間の性格に方向を与える不可分の根源的機能，ないしは感情の一つであることは，わたしの魂が現実のものである以上に信じて疑わぬところである。（中略）立派な分別を持ちながらも，法なるものを法なるがゆえに破りたいという気持が，常にわれわれにはそなわっているのではなかろうか？つまりこの片意地な気持が，わたしにとって身の破滅となったのだ。罪もない動物に加えた危害をさらに続けさせ，ついには極点にまで達せしめたのは，自らをさいなみ――自らの本性をしいたげ――悪業のために悪業をなそうという，この測りがたい魂の欲求であった。ある朝，わたしは平然として猫の首に縄をかけ，木の枝に吊した――頬には涙がつたい，悲痛な悔恨に胸を掻きむしられながら――縛り首にしたのだ。かの猫がわたしを慕っているのが分かっていたがゆえに，わたしに何一つ腹立ちの理由を与えていないのを知っていたがゆえに，縛り首にしたのだ。そうすることによって罪を――もしそのようなことがあり得るとすれば――わたしの不滅の霊魂を，限りなく恵み深く限りなく畏ろしい神の無限の慈悲すら及ばぬ彼方へ，堕し入れる怖ろしい罪を――犯していることが分かっていたがゆえに，縛り首にしたのだ。(63－4頁)

「分別」を持ちながらも，「法なるものを法なるがゆえに破りたいという気持」を抱く人にとって，アメリカは決して安住の地ではない。ポウとメルヴィルが安定の表現の器である「小説」ではなく，「物語」に向かったのは，両者がこの「分別」に対する「天邪鬼」を有していたからに他ならない。ノヴェルではなく，ロマンス(2)でもって表現する者の〈夢〉の世界は，もう一つのアメリカをめざしている者の心を語る場になる。ポウの1844年の詩「夢の国」におけるエルドラドとメルヴィルの『マーディ』（1849）の「夢」の章，第119章に窺われる作者の世界観の一部を並べて引いてみる。

1）ポウの「想像力」と「事実」

まずは，「夢の国」のポウ，1849年の「エルドラドオ」に先立つ５年前，1844年のポウはまじめに〈夢〉をうたい，同じ時期に〈夢〉を茶化すというパターンを繰り返していたポウを念頭に，「夢の国」を読んでみる。「夜」と「昼」とで分断されたポウは，〈夜〉の果てに，「『空間』のそと－『時間』のそと」の〈夢の国〉に到達した。

> 悩みは軍団をなして襲う心にとって／ここは平和な，慰めの国――／影の中を歩む精神にとって／ここは――おお，これぞ黄金の国！／しかし旅人は，ここを越えて旅しながら，／明らさまに見ることはない――敢えて見ることはない。
> その不可思議は，たえて曝されることはない，／開かれたままの人間のか弱い瞳には。／それを望む者はこの国の「王」，彼は禁じた，／縁取られた目蓋をひとたびもたげることを。／それ故に，ここを通り行く悲しい「魂」は／曇った硝子ごしにしか眺めることはできない。
> 暗く人けない道を過ぎり，／ただ悪霊の天使の群につき纏われ，
> そこに「夜」と呼ばれる一つの「まぼろし」の／黒い玉座にあってたじろがず治めるところ，／私はさ迷い歩き家路に着いた，ごく近頃，／かのおぼろげなテューレの国の涯（はたて）から。（152－53頁）

「悩みは軍団をなして襲う心」の持主は〈黄金の国〉に達した。しかし「私」の夢の地「黄金の国」の「不可思議」は「悲しい『魂』」には「曝されることはない」。こう語られる「夢の国」の曖昧性は，夢の国到達の事実と夢の正体の不可解さとの間にある。フォーティ・ナイナーズの目標と目的が明らかなところで，ポウの〈黄金の国〉は希求の地であることは明らかだが，肉眼では不分明なところなのだ。

その点「夢の国」の翌年，1845年の「シェヘラザーデの千二夜の物語」では数々の不可思議な場所が示されているが，アメリカの常識，良識の埒外でも「事実」を呈示していて，信用ではなく，信ずるに値するところが詩と散文におけるポウを示していると言えよう。

「シェヘラザーデ」は語り手が『テルメノウ・イジトソーオルノット』（ポウの創作による架空の書『教えてくれ，そうなのかどうか』）に依拠して，ある東洋学関係の研究上でなした「発見」を語っている。その「発見」の内容とは，千二日目の夜シェヘラザーデが語った船乗りシンバッドの物語を語り手が件の書物を引用して，今読者に語るものであった。

引用の引用の構造を持つこの物語は，作者にとってそれだけ「真実」に近くなるということだろうか。以下，「シェヘラザーデ」はシェヘラザーデが語ったことを記録している書物からの引用が続くのである。「世界」を見たがっているシンバ

（2） Bell（1980）によれば，アメリカの革命のエネルギーに見合うエネルギーの表現には「小説」ではなく，「物語」形式がアメリカの小説家に好まれ，特にポウとメルヴィルの文学はその実験性ゆえにラディカルなロマンスとしての特色が顕著である。

ッドの「地球周航という仕事」には，様々な国の見聞が含まれていた。次に掲げる物語の幾つかは，シェヘラザーデ王妃がシンバッド自身から聞いた話を，王に語っていることを伝えている書物からの引用を19世紀の読者に伝えたものであり，引用の引用の引用のテキスト世界なのである。

この物語でも詩の世界でもポウは大衆の信用する，実証された「事実」に対し，希薄度が強まれば強まるほど〈真理〉と〈美〉に近づく「事実」を語り，うたうのである。ポウの言語世界は，『ユリイカ』で頂点に達する言語宇宙の構想に向かって，進化してゆくのである。それは今あるアメリカに対して，もう一つのアメリカ像に向かった言語による創造行為だった。それは異常な国々の見聞記である。

(1)「『(中略) この国では，蜂と鳥が才識ゆたかな数学者であり，毎日この国の賢人たちに幾何学を教えているのでございます。ここの王様がたいへんな難問二題を出して，これを解いた者には褒美をとらせると申されましたところ，ただちに解答が提出されたのでございます――ひとつは蜂によって，他のひとつは鳥によってでございましたが。しかし王様はその解答を秘密にしておかれました。そして，人間の数学者たちは，長い間深遠な研究と仕事を続け，分厚い本をたくさん書いた後，やっとのことで，蜂と鳥とが即座に解いてみせた答えと同じ結果に到達したのでございました』」(153頁)

(2)「『私たちはただちにこの大陸の下を通りぬけました（牛の脚の間を泳ぎぬけたのでございます)。そして何時間か後，実にすばらしい国に到着いたしました。人間動物が教えてくれたところによりますと，これは彼の生れ故郷で同族たちが住んでいるとのことでございます。これを聞きまして，私は人間動物にたいへん尊敬の念を抱くようになりました。実際，これまで無遠慮な気やすい態度で応対したことを恥ずかしく思いはじめたのでございます。と申しますのは，一体に人間動物たちはえらい魔術師たちからなる国民でございましたから。彼らは脳髄のなかに虫を飼っておき，それが懸命に身を捩りもがくのに刺戟をうけて，実に不思議な想像力を発揮するのでございます』」(155頁)

(3)「『この魔術師たちのなかには，火喰獣の血液が血管に流れているような人もおりました。(中略) また別な魔術師はふつうの金属を金に変える術を知っておりました。しかも，製造中にわざわざ調べるようなことは一度としてないのでございます。また別な魔術師はたいへん繊細な触感を持っておりまして，眼に見えぬほど細い針金を造ることができました。また別の魔術師はたいへん眼がはやく，一秒間に九億回の割合で前後に振動する弾性体の動きを，一々数えることができました』」(157－58頁)

詩「夢の国」の〈黄金の国〉が肉眼では見えぬ「世界」とうたわれていたことを思い起こせば，以上の物語でのシンバッドの見聞した「世界」は，(1)蜂と鳥対人間の数学的才能，(2)人間動物たちの間の魔術師たち，(3)更に，多才な魔術師たちの諸相などのシンバッドの見聞には，触れなかった植物群の不可思議を含め，「事実」に「想像力」が加えた真理と美を伝えているのである。ポウの真理は美と接続しているが，それは肉眼の世界ではないのである。「夢の国」の詩人が想像力で見たものは「シェヘラザーデ」の次の物語と一致する可能性は強い。

途方も無い，理性の埒外の〈事実〉は王という権力・権威を前にして語られている。権力・権威対語り手の関係との間に共感を覚える読者にとって物語は楽しい。こうした作者の態度は社会的関心というよりは博物誌[3]に対する共感から獲得

されたものであろう。

(4)「『私たちは旅を続け，植物が大地の上にではなく，空中に生えている場所を眼にいたしました。他の植物体から生えているものもございました。また，生きている動物の体から派生しているものもございました。それからまた，全体が激しい炎で輝いているものもございました。気の向くままにあちらこちらと場所を変えるものもございました。さらに驚くべきことは，生きていて，呼吸をし，思うままに手足を動かす花を見出したことでございます。そればかりでなく，他の動物を奴隷にして，恐ろしく侘しい牢獄に閉じこめておき，命じた仕事をやり遂げさせよう，という人類特有のあの忌わしい情熱まで，この花は持ちあわせていたのでございました』」（151頁）

常識・良識が捉えた「事実」を超えた〈世界〉はカリフォルニアの金鉱の世界ではない。(3)と(4)を結ぶ想像力は魔術のそれであろう。「シェヘラザーデ」の末尾で，語り手は『イジトソーオルノット』が述べるところによると典拠を示しつつ，「良心に従う廉直の士」たる王によって〈嘘〉をついたシェヘラザーデはその運命に服したと語り，最後の言葉を読者に投げかける。「彼女は(弓の弦が徐々に首を締めつける間に)，まだ話していない物語がたくさんあること，残忍な夫は癇癪を起したおかげで多くの想像を絶した冒険物語が聞けなくなり，それによって当然の報いを受けたこと，などを考えて大きな慰めを得たのであった。」（161頁）

2）メルヴィルの「世界」と「自己」

ポウが「夢の国」，「シェヘラザーデ」を書き，『ユリイカ』（1848）に向かっている間，メルヴィルは海洋冒険譚の第三作『マーディ』を書いていた。マーディとは大洋に浮かぶ「新星座」ともいうべき珊瑚礁に囲まれた多島海に付けられた呼称である。主人公タジとその一行がマーディで失踪したイラーを求めて，島巡りをしている間，マーディ海は地球大の「世界」に変わる。タジたちはまず英国に渡り，ヨーロッパから大西洋を横断し，アメリカ合衆国に行き，ホーン岬から西へ向かい，アメリカ西海岸のゴールド・ラッシュを見聞し，太平洋を横断し，やがて「海図なき航海」（第169章）に踏み込んでゆく。

マーディ海が「世界」に変貌していく作品過程は，作者も認めているように前衛的なのだ。杉浦銀策『メルヴィル　破滅への航海者』によれば，『マーディ』の世界構造とは，「まず地球という一つの世界があり，その中の南太平洋の片隅にマーディ海が存在し，やがてこのマーディ海がいま一つの地球的規模の世界にふくれあがることによって，そこにさらにもう一つのマーディ海が内在するという円心円的なものとなる。」（50頁）こう分析した後，杉浦はメルヴィル世界とポスト・モダニズム世界との共通性を指摘する。

> 世界の中にマーディ海が存在し，このマーディ海がもう一つの「世界」にふくれあがることによって，その中にいま一つのマーディ海が内在し，他方主人公のタジが「世界」の中の「世界」としてのマーディ海に踏み入り，ここで世界周航の旅を果たし，もう一度世界内世界としてのマーディ海に入り，さらにこの世界内世界から外なる世界に舞い戻るという同心円的構造について考察をめぐらすたびに，私はジョン・バースの処女作『水上オペラ』（1956年）と『怪獣キメラ』（1972年）の「作品内作品」を想い起こす。（52頁）

（3）　ポウとメルヴィルは白人・男性という〈父〉を形成する威厳に対し，動植物に対する博物的関心を抱き，作品化している。弱者に対する両者のまなざしから，強者への志向のカリフォルニア表象に対し，反カリフォルニアなるものを求めたといえる。

『マーディ』は文明のなかに天上的無垢の存在イラーを求め，作品構造が示す「世界」内外を彷徨うタジの物語であるが，メルヴィルの〈夢〉構造はどのようなものか問うてみなければならない。ポウの〈夢〉と「世界」とのかかわりの比較で臨んでみよう。

> 夢！夢！黄金の夢。花咲く大草原のように限りなく，黄金の色をした夢。
> ……円を描く永遠の大草原。黄水仙の葉叢がつづく。わが夢は地平線上で若葉を食らうバッファローの群れだ。それも若葉を食らいつづけて世界をぐるりと一周するバッファローの群れだ。
>
> （中略）
>
> だがわが足下にはいま赤道があり，地球は勇士の心臓のように脈打ち，脈打つその鼓動は私自身なのかもしれぬ。わが魂は海の深みにもぐる。空の高みに登る。そして流星のごとく，限りない広がりのなかをゆれて渡る。世界はすべてわが肉親。そしてわが肉親のために私は念ずる，それぞれの道にとどまれと。だが私は綱で大商船を牽引する強力な三層艦のように震え，あえぎ，力をふりしぼって航行している。私に足枷する綱を投げすてたい。
> ……私は千の魂に満ちあふれている……
>
> そう，たくさんのたくさんの魂が私のなかにある。わが［南海の］静寂に，わが小船は〈永遠〉の海に恍惚として横たわり，一人が，あるとき語ればすべてが一つの声になってそれに唱和する。フレンチ・ホルンと角笛のオーケストラ。上昇し，下降し，うねり，黄金色のなかに呼び交わす。
>
> ときに大西洋，太平洋がかくのごとく私の周囲に波打ち寄せる。そのとき私はその中心にいる。つまり私は引き潮にも満ち潮にも無縁の地中海である。そして再び，私は世界の果て，嵐の角の頂きで空中高く舞い上がる鷲のごとくに音どものなかに投げ込まれる。
>
> しかし再び私は下降しそして音どものおりなすコンサートに耳を傾ける。
>
> 巨大なる母岩のうねりのごとく，ホメロスのいにしえのオルガンはその低音を波打たせ……わが高みはシェイクスピアが立ちのぼる。……盲目のミルトンが低音部をかき鳴らす……。
>
> （中略）
>
> 私の頬は書いているうちに蒼白と化してゆく。紙の上を走るペンの音にギクッとする。私が産み落した鷲の子が狂ったように私をむさぼり食うのだ。こんな大胆なことは止めにしたい。だが鉄の鎧に包まれた手が，まるで万力にかけるように私の手を締めつけて無理矢理すべての字を書かせるのだ。私に憑いたディオニソスを払いのけたい。
>
> （129－32頁，千石英世訳，下線部筆者）

ポウの「夢の国」や「黄金虫」における〈ゴルコンダ〉の夢表象と共に，やはり〈ゴルコンダ〉探求の書，『マーディ』第119章の「夢」が反カリフォルニア表象として成立しているかを見極めていくため，私たちはゴールド・ラッシュという形であらわれたヨーロッパのカリフォルニアの夢の実現とポウ／メルヴィルの想像力の質とその想像力と現実との亀裂から生じた，もう一つのアメリカ像を追ってゆく必要があるのだ。19世紀アメリカの「事実」に対峙したポウとメルヴィルがいかにその「事実」世界に対し，ヨーロッパの想像力経由で，もう一つの「世界」を読者に呈示していたのだろうか。

メルヴィルは，ポウが「夢の国」や「シェヘラザーデ」で龍やスフィンクスなどの実在ではなく，信仰に達する想像力を問題にしつつ，虚構の真実，すなわち文学の力を問うていた間，「わが記憶はわが生誕以前の生である。わが記憶はわがバチカンの図書館」と述べ，作中人物の行動とそれを語る語り手とそれを記す作者との一体化という本を書いた。千石英世の『白い鯨のなかへ』を引いておこう。杉浦が指摘する『マーディ』の「円

心円的構造」はこの一体化のメカニズムに支えられているのである。ポウ以上に英雄，語り手，作者間の一体化に意識的だったメルヴィルの〈本〉とは何か。

> メルヴィルは本を書いた。そして本のなかには語り手がいて物語を語った。その物語のなかには主人公がいて冒険的な行動をとった。メルヴィルの作品の世界は，ほぼすべて，これら三者を結び合わせて出来上る三角形の形状によって律せられているといえるだろう。さらには，ときにこれらの三者は一体と化し，三位一体の瞬間，三位一体の究極点と化すこともある。引用した「夢」の章にはこれら三者が出揃い，主人公は語り手となり，語り手は作者と化しているといえる。そこに主語として用いられた「私」が，主人公の「私」から語り手の「私」へ，そして作者の「私」へと移行しつつ重なりあって行くのである。（133頁）

〈マーディ〉とは，美少女イラーYillahがlilyから，饒舌の哲人ババランジャーBabblanjaがbabbleから名を得ているように，Mardiがdreamに由来する〈夢の国〉なのである。「燃える海」に始まる物語第二幕（第39章～64章）は夢現のあわいを場とし，イラーは夢現のあわいに生じる幻影なのだ。第三幕（第65章～187章）では，第119章「夢」と深く関わる。私たちの主題〈カリフォルニア表象〉の場，第166章のフォーティ・ナイナーズとの出会いの場面に私たちの議論は注目していくことになる。

第166章は，終幕（第188章～195章）で決定的に姿を見せる『マーディ』の破綻，「作者，語り手，主人公という三点を，ある一点と化すために犯された破綻」（千石，111頁）との関連で，メルヴィルのカリフォルニア表象を捉える契機を与えてくれる。メルヴィルにとって，作品の創出する虚構の世界と作品を創出する現実の世界とを結合しようとした試みとカリフォルニアとはいかなる相の下でアメリカでつながっていたのであろうか。アメリカ人たち，ヨーロッパの人々がカリフォルニアを目指していったことをメルヴィルがタジとババランジャーを配して『マーディ』を書いたこととの間にいかなる距離を見出すことになるのか。

第166章を検討すれば，私たちは旧世界から新世界へと歴史を推し進めてきた近代と近代文学との関係を見出すことになろう。とりわけ，〈ロマンス〉形式を採ったアメリカ19世紀の物語作家メルヴィルとポウのアメリカとの〈関係〉が各々の詩「夢の国」と物語『夢の国』におけるカリフォルニア表象の意味が浮上してくるのではないかと思われる。ひたすら「西」の〈未来〉を信用する「ゴールド・ハンターたち」はうたう。

> 俺たち大胆な流浪者たちは／黄金の国へ／転がる大波の上を滑走してゆく／黄金という戦利品のためなら／労苦をいとわず／あらゆる辛苦に耐えるのだ。／見てくれ！見てくれ！／俺たちの船首にぶつかる抵抗できない荒波に飛び交うのは金色の閃光を放つ金色の魚たちだ！／金色の太陽の下／俺たち大胆な流浪者たちは／黄金の国に追っている／毎晩／俺たちは弱まることのない金色の星々を頼りに／正しく進むのだ！／火はすべて金色の輝きで燃えている／金髪ほど明るい髪はないのだ！すべてのオレンジの木立には金色のほとばしりが見える／朝という朝にはすべて金色の光で明けるのだ！
>
> 昔からの伝説によれば，黄金の雨のなかで／乙女は黄金の神がその愛を獲得したそうだ！／金色の盃のなかでぶどう酒は光を放っている／金色の寝台の上で王たちは夢みているのだ！／黄金律は多くの涙を乾かすのだ！／黄金数は天球を統べるのだ！／黄金，黄金なのだ国々を支配するのは／黄金なのだ！黄金なのだ！すべての回転の中心は／金色の心棒で世界は回転している／燐光で海は燃えているのだ！／ほたるのすべては金色の輝きで

燃えている／黄金を探求する者たちの心は金色の夢で燃えているのだ！／金色の矢で王たちは殺される／黄金でもって俺たちは自由人の名を買うのだ！／わずかなかせぎを手に入れるため骨のおれる取引をし／ふるさとで俺たちは抑えつけられた野望から奴隷のように働いたさ／光もなく希望もなく！ああ，苦しい悲哀だ！／夜はたちまち去り昼は遅々と続いていたのさ

しかし今や熱いまなざしで喜々としているさ／約束の地へと速く俺たちは飛んでいく／深い鉱山には宝が光っている／金色の流れる河床を下って黄金の砂が金色の光で閃いているのさ！／いかに俺たちはふるい分けを願っていることか／あの黄色い漂流物を！／川よ！川よ！去るのはやめろ！砂洲よ！盛り上がって流れを停止させよ！／俺たちが金色の流れを手にするまでは／そして金色の港に馬でのりつけるまで！（545－46頁）

2年後，1851年の『白鯨』の追跡者たちの語りと「ゴールド・ハンターたち」のうたとはどこに差異を見出せようか。後者を仮に三区分するとすれば，①現在の黄金の国への人々の夢，②古代からの黄金律の世界への信頼，③人々の未来の黄金獲得実現の可能性がうたわれていく。現在－過去－未来という時の中での人々の楽観的な金の夢は，このうたで悲観的に扱われている印象は免れがたい。メルヴィルの対現実の眼は厳しいのだ。後の英雄的とは言え，作者の白鯨追跡の徒労感が，既にこの過去よりは未来志向のカリフォルニアのうたに表れているようだ。

『マーディ』166章の「黄金の探求者たち」のうたは，既に語られた第38章の「燃える海」の作者のコメントに照らし合わせて考えると，〈夢の国〉の物語のなかでアイロニカルな関係をもってしまっている。〈黄金の探求者〉ポウもメルヴィルも〈夢の国〉を目指し，幻想と幻滅とのあわいで，常にポウは死を凝視し，メルヴィルは真理を捉えようとし，決して「未来」に賭けることはなかった。歴史と反歴史，過去と現在との間で虚実の世界を見つめる両者にとってフォーティ・ナイナーズの追跡はアイロニーを誘うものであった。

カリフォルニアの夢にはただ経済活動の夢，「信用」による〈未来〉への夢でしかない。『マーディ』第38章「燃える海」で，主人公＝語り手＝作者は「水夫たちは驚異を愛し，驚異を繰り返すことを愛する」と述べ，海の燐光の伝説に思いをはせるのである。その時，三者は，「明白な運命」に対する嫌悪感から，「より信頼できる説を記す」と信用ではなく信仰の言葉をもらす。

3）ポウの『ユリイカ』への軌跡

19世紀アメリカという「事実」偏重の時代，軽信の時代にポウとメルヴィルは幽霊，神，霊魂の不滅など信じようとも信じなくとも，信仰の対象は「証明」を必要とするという考え方は受け入れられなかった。そういう時代精神に懐疑をもって生き，読むことと書くことのラディカルな「必要な仕事」をなしたのが両者の19世紀アメリカでの達成であった。それは「天邪鬼」と〈猫〉(4)とが結びついていた。

「民主主義とやらいうものを信ずる烏合の衆」を相手に活躍する実業家ピーター・プロフィットは，街頭宣伝販売人，目ざわり屋，暴行殴打業など「職」を転々として，今，泥はね業に従事している。彼はその職を「組織だったやり方」で全うしたと「実業家」(1840) で語られる。その職は「信用」との競争が問われるものであった。

おれはまず，慎重に考慮したあげく交差点をえらびだし，町のそれ以外の部分にはいっさ

(4)〈猫〉はポウとメルヴィルの文学の中で真理と美に接近する際，重要なイメージとなっている。アウトサイダー作家にとって〈猫〉は無視しえない生き物であった。とりわけ，「黒猫」と『ピエール』に表れた曖昧な世界を示唆する〈猫〉は重要だと思われる。

い手を触れなかった。おれはまた，すぐに駆けつけられる，すばらしい小さな水溜りをそばに注意深くこさえておいた。かかる手段によって，信用ある人物としておれの名声はとどろいた。これで，商業戦争の半ばは勝利をおさめた，といわねばならない。みんなはかならず銅貨をなげ，汚れのないズボンのままで交差点をわたった。この点に関しては，おれの事業方針が理解されたから，詐欺に会う心配はなくなった。ごまかされたとすれば，かんべんしなかっただろう。誰もごまかした者はなかったし，またごまかされることもなかった。銀行の詐欺はどうにもならぬものだ。取引中止宣告は，おれを身動きもならぬ破滅に追いこんでしまう。だが，これは，個人ではなくて会社なのだ。そして，分りきったことかも知れないが，会社というものは，けとばしてやろうにも罵倒しようにも具体的な人間がいないものだ。(402頁)

ピーターの成功の原理は「人間をつくるものは規律であって，金ではない」にあった。「信用」を売りものに金儲けするアメリカに挑む彼の姿は「時計」に負けない〈規律〉であって，それを守り通してきたお蔭であった。心も身体もない銀行とは異なり，心身共に規律を体現する人物，それがピーター・プロフィットなのである。

おれは実業家。おれは規律正しい男。規律というものは，やはり，実体をそなえたものである。しかし，何も分かっちゃいないのに，規律についてぺらぺらとまくしたて――その文字を正確に心得ていながら，その精神を毒する――おれはそんなマトはずれな愚か者たちを，何者にもまして心から軽蔑する。(393頁)

メルヴィルの『白鯨』直後の1852年の作『ピエール』の語り手兼主人公ピエールと同じ「石」の意味を持つピーター・プロフィットはその後，八度目の，しかも最後の「投機」として，猫の飼育業を始めた。「利益」をめざすプロフィットは〈猫〉に目をつけたのだ。

この国が猫に荒らされるのはよく知られている。その被害は最近あまりにもはなはだしいもので，きわめて多数の誠意ある署名を連ねた救済嘆願書が，さきごろ開かれた記念すべき議会に提出された。議会は，この画期的事件にあたってすぐれた識見を示し，あまたの聡明健全なる法令を通過させたが，なかんずく猫令の制定は他を圧するものがあった。この法令は，原案においては，猫の頭数に比例して賞金（各四ペンス）を支払う趣旨であったが，上院は，「頭」を「尾」におきかえるという主要部の字句の修正に成功した。この修正は明らかに妥当なものであったので，議会は満場一致可決した。

州知事が法案に署名をおえるやいなや，全財産を投入して，トムとかタビーとかを買いこんだ。最初のうちは鼠（こいつは安いものだ）を食わせてやるのがせいいっぱいであったが，彼らは神の摂理に従い驚嘆すべき比率でふえたので，ついには気ままに振舞わせ，かきとかきじばととかを好き放題に食わせることにした。猫どもの尾は，公定価格でさばくといい金になる。（中略）それに，動物たちもすぐこの商売になれて来て，この附属物をほうっておくより切りとってもらうほうが好きなのも気にいった。そんなわけで，おれはやっと成功者になりおおせ，ハドソン河のほとりに大邸宅を買うことになった。

(404－5頁)

『ピエール』の主人公ピエールの旅が石と火との間で，地獄堕ちしていくように，ピーターは悪魔との共謀で，猫を使った投機で成功を収めた。両者の下降への旅は，猫の精神風土で展開される，天邪鬼の発揮形態であった。それは反カリフォルニア表象を生んだ。

ポウは自己の文学の総決算として『ユリイカ』を書いた。ワシントン以来のアメリカ，そこに存在してアメリカ史を築いていった人々の偽善を暴露し，彼らの依拠する世界像を転倒させ，もう一つのアメリカを宇宙大に表現しようとした。序と結びを引いておく。

> 私を愛してくださる，そして私の敬愛する少数の方々へ——思考の人よりも感ずる性向（たち）の方々へ——夢想家へ，そして単なるさまざまな現実と同様に夢のことどもを信ずる方々へ，私はこの**真理の書**を捧げます。といっても，この書には**真理の語り手**としての資格があるというわけからではなく，この書の真理のうちに澎湃（ほうはい）たる**美の**ゆえに，かつはまたその真実さの地を固めている美のゆえに，これをお贈りいたすのであります。これらの方々にこの作品を，ただ一個の**芸術品**として，——いわばまあ**物語**（ロマンス）とでも申しましょうか，さらに自惚れがすぎるとのお叱りを受けなければ，一篇の**詩**としてお贈りいたすのであります。
>
> 私のここに提唱いたしますことは真であります，だから滅びる筈はありませぬ。よしや蹂躙（ふみくだ）かれて死に瀕する場合があってもやがては「**永劫の生命**に蘇生する」でありましょう。
>
> さもあらばあれ，私の死後，この作品はただ詩としてのみ批判されることを希望するものであります。（109頁）

> **人間**は徐々に自らを**人間**と感じなくなり，ついに自らの存在を**エホバ**の存在と認識する恐ろしきまでに勝利に充てる日を迎えるにいたるだろう，と考えてみよ。その日まではともあれ，小は大のうちに，一切は**神霊**のうちに宿りつつ——一切は**生命**裡の**生命**——**生命**——**生命**なることを忘れるな（170頁）

ポウは『ユリイカ』直後，1849年，死の年，『ユリイカ』を復習するかのように「メロンタ・タウタ」を書き，『ユリイカ』の弁護を行った。気球の上からアメリカの歴史をふりかえる作者には『ユリイカ』という，もう一つのアメリカ像を創造した自負があった筈である。ワシントンのコーンウォリスに対する勝利の記念碑を見下ろしながら語り手は，アメリカのモブの愚かさを笑うのである。時は1847年の10月19日，語り手はニューヨーク市で行われた儀式を見る。

> それが行われた場所はヨークタウン（それがどこであるかは知らないが）であり，だれが降服したかといえば，コーンウォリス将軍（間違いなく裕福な雑穀（コーン）商人だ）が降服したのだ。彼は降服した。この碑文は降服を——そうだ，「コーンウォリス卿の」降服だ——記念している。ところが唯一の疑問は，野蛮人どもは彼を降服させてどうしようとしたかということだ。だが，これらの野蛮人たちが間違いなく人食い人種だったということを思い出す時，彼らはコーンウォリスをソーセージにするつもりだったという結論に達するのさ。どんなふうにして降服したかという点については，これ以上はっきり語っている言葉はない。コーンウォリス卿は（ソーセージにされるために）「ワシントン記念教会の賛助をえて」——これは明らかにすみ石を据える慈善施設だ——降服させられたのである。
>
> （321頁）

アメリカのデモクラシーに盲従するモブ－その存在こそポウの文学的生涯の原動力であった。反アメリカのさまざまな表象を形づくってきた大きな動因として大衆の存在があった。『ユリイカ』において頂点に達した反アメリカ像の諸要素の一つに反カリフォルニア表象が数えられるのである。

結び　アメリカ人の性格とカリフォルニア表象

19世紀アメリカの「事実」軽信は20世紀のアメリカのそれでもあった。ヨーロッパのスペイン及びラテンアメリカ諸国に対する「黒い伝説」(5)の影響下にあったアメリカ合州国は19世紀では対メキシコと対スペインとの侵略戦争の後，1910年のメキシコ革命勃発後のメキシコに侵入した。「ラ・クラカーチャ」にうたわれている，マリファナが切れて歩けなくなったゴキブリたるメキシコ人たちへのアメリカ人の悪感情はパンチョ・ヴィラ追跡のうたに反映していた。

> はるばる行くぜ，ヴィラをとらえに／行く手は遠い／国境を越えてどんどん行こうぜ／そこは薄汚いメキシコ野郎の巣くうところ
>
> （107－8頁）

パーシング将軍が率いるアメリカ軍の追跡のうたの調子は，その後のアメリカの禁酒法の失敗やハーレム・ルネサンスへの嫌悪にも窺われることになるが，マイノリティに対するアメリカの態度は，19世紀からの伝来のものであった。1937年は今48州によるマリファナ所持の違法が決定した年であった。ハリー・シャピロは『ドラッグinジャズ』（1988）で，1931年逮捕されたルイ・アームストロングの様子を伝えている。

> あれは大きなクラブに出演中だった。映画スターをはじめとするおれのファンが大勢つめかけて，連夜超満員だった。それはともかく，おれは休憩時間に，（中略）ジョイントを吸いながら，笑ったり，しゃべったり，くつろいだ時間を過ごしてたんだ。そんなとき，車の後ろから，ばかでかい頑健そうな男が二人，なにげない様子で現れ，「そのローチ（マリファナの吸いさし）をこっちに渡してもらおうか」っていったんだ。（113頁）

マリファナ不法所持は６ヶ月の刑だった。このカリフォルニア州法は，全米の先陣を切って1915年に制定されたものだった。ジャズ（後にロック）・ミュージシャンはマリファナが危険なドラッグではないかと言われだした当初から，マリファナとの関わりから，無法者呼ばわりされていた。ルイの1931年の逮捕の前年1930年９月，新設の麻薬取締局の局長にハリー・ジェイコブ・アンスリンガーが就任して以来，マリファナはドラッグであるというイメージが定着していき，1937年に連邦法でマリファナは違法となった。

ところで，1915年カリフォルニアが全米の先陣を切ってマリファナ禁止を打ち出した背景について考えられることは，金と国家意識をめぐるカリフォルニアの歴史であろう。石川好の『カリフォルニア・ストーリー』から関連箇所を引いておこう。

> 通りすがりの妻や娘たちが／トミーとして知られる魅力ある少年
> 日本から来た賢い，／黄色い肌のトミーのまわりに集る
> トミーは唄（TOMMY POLKA）まで作られることになる。
> アメリカ人に人気を博したイエロー・トミーというカリフォルニア物語とはおよそ関係のないように思われる話をしたのは，イエロー・キッドの漫画と1900年代にハーストがサンフランシスコで大々的なイエロー・ジャップのキャンペーンを張ることとに，何か因縁めいたものを感じるからである。つまり，ハーストが，排日のキャンペーンでサンフラン

（5）反スペイン「黒の伝説」を推進したアングロ・アメリカに対し，ポウとメルヴィルはアメリカスの視点から自己の文学を確立した。反スペイン，反黒人，反女性のホワイト・アメリカに対する両者の文学的言説は，〈進歩〉の19世紀アメリカにとって進歩そのものを問う上で不可欠なものであった。

シスコで部数を伸ばすのは，案外，トミーの件にしてもイエロー・キッドにしても，「イエロー」は金になると値ぶみしたからではあるまいかという気がするのである。ハースト系の新聞が日米開戦に至るまで，“イエロー・ジャップ”の論調を変えなかったのはつとに有名（171頁）

「日本移民の流入を拱手傍観するならば，十年もたたないうちにロッキー山脈西の人口の大半が日本人によって占められ，同地域は日本化されてしまう……その権利を日本に認めるくらいなら，明日にでも戦争をする方を私は選ぶ」

これはマハンの，日露戦争直後の日本人移民および日本に対するカリフォルニア防衛論を考案した書簡の一節である。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて，日露戦争をはさみ，日米はカリフォルニアをめぐって，マハンの言葉に代表される“カリフォルニア覇権紛争”の時代に突入していたのである。こうした時代感情が底流となって，（中略）排日のオンパレードである。これの先頭に立ったのが先に述べたハースト系の新聞であった。（185頁）

カリフォルニアにおける金色－黄色の意味の変遷と歴史的に眺めてみると，私たちはアメリカにおけるマジョリティとマイノリティの緊張表現の連続性に直面するのである。黄金に憑かれた人々と黄金の男たちとの差異は，21世紀の問題でもある。文学の力を信じる私たちは今後も現実に対峙して，カリフォルニア表象を正視していかねばならない。

その意味で，石川好の1984年刊『カリフォルニア・ナウ』は80年代のアメリカとカリフォルニアを論じて，興味深い。なかでも，カリフォルニア前線の変調としてラティノースたちによる新しい前線の追跡は本稿のテーマ〈カリフォルニア表象〉の現在を伝えている。ラティノースたちはなぜ，カリフォルニアを目指してきたのか，そしてカリフォルニアはどこへ行こうとしているのかと問題提起する石川の論拠は以下にありそうである。人間の歴史を侵入と捉え，その侵入の歴史に別の要素が，つまり資本が世界に侵入した〈カリフォルニア・ナウ〉をこう眺めている。

単に二つの文明が全面的に対決しても，どちらかが一方的に蛮族的でなければ，相手の文明が滅びるような破壊は起こりえない。この場合蛮族的というのは文明の程度を表わすものではなく，破滅への意志を意味する。

近代は世界的な規模で資本主義社会を生み出して行ったわけだが，資本の世界性は，あらゆる文明の差異をつき抜けて，すべての人間を紙幣経済の中につつみ込んだ。そのことは，今われわれがここで語っている話の内容に照らして考えると，蛮族という異人種すら消滅させたことになる。（67頁）

「資本の世界性」は，ゴールド・ラッシュという突然の事件によって，19世紀のアメリカを席巻した。メキシコ人たちのこうしたアメリカという国への流入の性格は，「伝書鳩」と言われる。「メキシコ人をアメリカに定住させない社会構造をカリフォルニアが作り出し，メキシコ人はそうした生活圏の中でしか生きられないように飼育されていた」と述べ，石川は，メキシコ人労働者から金を巻き上げる鉄道会社の金儲けという体質を憲法におけるビジネスの影響にさかのぼって説明している。「メロンタ・タウタ」が思い出される。

人生そのものをホモ・ビジネスとして生きているアメリカ人が作り出した国家の政治政策に，ビジネスの要因が必然的に介在しないのであろうか。しかしそれどころか，実はアメリカの合衆国憲法からしてビジネスの影響下で草案されているという説すら存在しているのだ。

「……フィラデルフィアの独立記念堂に集ま

った代表たちによって1787年に採択された憲法は，金融業者，資本家，公債所有者，製造業者等の動産所有者による利害が，小農民や負債者の利害に対して勝利をおさめたことを意味するものであった。……最も積極的に憲法を成立させようとした者は，公債の利子と元金とを支払ってほしいと望んでいた者であり，海運業，製造業，西部の土地投機に対して有利になるような商業上の規制を望んでいた者であった」

以上はロバート・B・ダウンズの『アメリカを変えた本』に取り上げられた，ビアードの『合衆国憲法の経済的解釈』の一節である。ホモ・ビジネスたるアメリカ人が作れば，憲法ですら経済性が優先されるとあれば，それが外交問題となれば，さらに露骨に現われて来ても不思議ではない。（176頁）

アメリカ憲法に始まり，メキシコ人移住の問題に至るアメリカ人の〈ホモ・ビジネス〉性の歴史の中に，私たちのゴールド・ラッシュの人波に見られた〈カリフォルニア表象〉は結びついていたのだ。太平洋戦争後のカリフォルニアからニクソン，レーガンという軍事大国を指向する大統領が出てきたことは，こうした歴史と切り離して考えることはできない。ヴェトナム戦争の敗北の後，レーガンの1980年代はマチズモを主張した。

この強いアメリカの象徴レーガン大統領のマチズモの視座に対し，ウェブスターは『アメリカを見ろ！』（1993）のなかで，80年代アメリカ演劇の代表サム・シェパードを論じている。彼はシェパード演劇に見られる男らしさの誇示マチズモの矛盾や土地と性とのつながりに注目した。

最近のアメリカ文化を論ずるにあたって彼はなくてはならない存在であり，その意味で，シェパードがアメリカン・マチズモの登場人物たち（カウボーイ，農民，犯罪者，流れ者，ミュージシャン）に見せるこだわりもきわめて重要なのである。彼の作品は，（中略）土地への信仰が幻にすぎないことを明らかにするものだ。シェパード劇に表われたマチズモは，本質的な属性というよりはむしろ文化によって形作られたものであり，しかもその文化は毀誉褒貶のかまびすしい，危険なまでにアメリカ的なものなのである。こうした問題提起にとって典型的な舞台となるのは荒野である。しかし，この古典的なウェスタンの舞台にも，いまやそこかしこにモダンなポップ・カルチャーの破片が散らばっている。

（12－3頁）

レーガン・カントリーの矛盾をついたシェパードは19世紀アメリカのマチズモを観察したポウやメルヴィルのアメリカ文学の伝統を思い起こさせる。メルヴィルは世界の中に自己を定立させようとして，世界とは別世界の虚の中に基軸を求め，創作に生涯を賭けた。『白鯨』114章「鍍金師」の中で，作者は自然に対峙するエイハブ船長，スターバック，スタッブの三人のアメリカ人を描き出した。

われわれが二度と纜（ともづな）を解くことのない最終の港はどこにあるのか？（中略）棄児の父はどこに隠れているのだろうか？われらの魂は，嫁がずして孕んだ子を生み落として死んだ母の後に，独り遺された孤児に似ている。われらの実の父の秘密はその母親の墓場の中にあり，それを知るためには，われわれもまたそこの墓場に赴かねばならぬ。

その同じ日に，スターバックもまた，彼の短艇の舷側からその同じ金色の海を遠く眺めながら，低い声で呟いた——

「測りがたい美しさだ，恋人がおのれの花嫁の眸にも見出しがたい美しさだ！——海よ，おまえの鮫の歯ならびや人を誘惑（かどわか）す人喰いの習性については口を噤んでくれ。信仰には現実を，記憶には空想を追い出さしめよ。おれはいと深きところを覗きこみながら信じるのだ」

他方，スタッブは魚のごとくに鱗を煌かせて，同じ金色の光の中に跳びあがった――「おれはスタッブてんだ。スタッブの人生にもそれなりの波乱はあったさ。だけどここでは誓って言うぞ，これまでおれはいつでも陽気であった，とな！」(483頁)

ホモ・ビジネスの作ったアメリカと，虚構を作ったアメリカ文学とが角逐するアメリカ合州国を概観してきた私たちは，〈カリフォルニア表象〉と〈反カリフォルニア表象〉として両者の営みを検討するため，E. A. ポウの芸術と現実との格闘をさらに読み続けねばならない。

19世紀アメリカでの，ポウの反エマソン的態度は，メルヴィル文学に支えられていた。レーガン・カントリーとその後のアメリカの中で文学はエマソン的なるものー自然を客観的に独立したものとして見るのではなく，人間精神の表れ，すなわち，自然を人間から見て，二次的，従属的なものと見なす態度との闘いを続行していくだろう。21世紀のアメリカス理解にとって，ポウの反カリフォルニア表象は意義あるものなのだと思う。今後，さらに，アメリカのフロンティアと象徴主義の展開のなかで，メルヴィルとの比較で，ポウ文学と反カリフォルニア表象を問い続けていきたい。

〈引用文献〉

アリストテレス『アリストテレス』田中美和太郎編，筑摩書房，1966年。

ボードレール，シャルル『悪の華』鈴木信太郎訳，岩波書店，1961年。

Bell, Michael Davitt. *The Development of American Romance : The Sacrifice of Relation.* The University of Chicago Press. 1980.

Feidelson, Charles. *Symbolism and American Literature*. The University of Chicago Press. 1953.

Fussell, Edwin. *Frontier American Literature and the American West*. Princeton University Press. 1965.

石川好『カリフォルニア・ストーリー』中央公論社，1983年。『カリフォルニア・ナウ』中央公論社，1984年。

マルクス，カール「汽船が太平洋を横断するまで」『遺稿集』第３巻，服部之総訳，中央公論社，1931年。

Melville, H. *Mardi The Writings of Herman Melville*. The Northwestern-Newberry Edition, 1970. *Pierre The Writings of Herman Melville.* The Northwestern-Newberry Edition, 1971. 『白鯨』野崎孝訳，中央公論社，1972年。

ミッチェナー，ジェイムズ『センテニアル』河出書房新書，常盤新平監訳，1974年。

Poe, E. A. *Poe Poetry and Tales*, The Library of America, 1984. 『ポオ小説全集』東京創元社，1974年。『ポオ詩と詩論』東京創元社，1979年。『ポオ　ボオドレール』筑摩書房，1977年。

Polk, Dora Beale. *The Island of California A History of the Myth.* University of Nebraska Press Lincoln and London. 1991.

リカルドゥー，J.『小説のテキスト』野村英夫訳，紀伊國屋書店，1974年。

千石英世『白い鯨のなかへ　メルヴィルの世界』南雲堂，1990年。

シャピロ，ハリー『ドラッグinジャズ』坂本和訳，第三書館，1988年。

杉浦銀策『メルヴィル　破滅への航海者』冬樹社，1981年。

Twain, Mark. *Pudd'nhead Wilson*, A Signet Classic, 1964.

ウェブスター，ダンカン『アメリカを見ろ』安本真訳，白水社，1993年。